

日常の困り事から在宅医療まで

高齢者の暮らし支援

市立大、鳴子団地で実践

住民の高齢化が進む鳴子団地。市立大は拠点を設け高齢者支援のあり方を探る。緑区鳴子町で



市立大は、名古屋学院大や名古屋工業大と協力し、高齢者が自分の住む地域で人生をまっとうできる社会づくりを目指す取り組み「なごやかモデル」を9月から緑区の鳴子団地で始める。同団地内に拠点を設置し、学生たちが住民の健康調査や在宅医療の研修などする。

(中村禎一郎)

なごやかモデルには、医学部や薬学部、看護学部の学生や研修医などが参加。鳴子団地で毎週催しを開き、住民との交流を深めることからスタートする。

その後、団地内の「コミュニティ・ヘルスケア教育研究センター」を拠点に、蛍光灯の取り換えといった日

来月からモデル事業

常の困り事から老老介護の相談、ボランティアの紹介、在宅医療まで対応。高齢者が自分の家で暮らすことを支えていく計画だ。

今回の試みでは、モデルがうまく機能するかを確かめると同時に、取り組みを担う人材の育成も目的。名古屋市立大学医学研究科の早野順一郎教授は「取り組みがうまくいけば、同じ方法が全国各地で応用できる。いわば『名古屋モデル』ができあがるということ」と話す。

鳴子団地は都市再生機構(UR)が所有する二千戸の賃貸住宅。高齢化率は40%を超え、市全体の22%を大きく上回る。一人暮らし世帯が半数を占めており、名古屋市は「鳴子団地は将来の名古屋の縮図」と考え、今回の対象地区に決めた。

なごやかモデルは、文部科学省の「未来医療研究人材養成拠点形成事業」に選ばれ、本年度からの最長五年間、補助を受ける。本年度の補助額は一億二億円となる見込み。